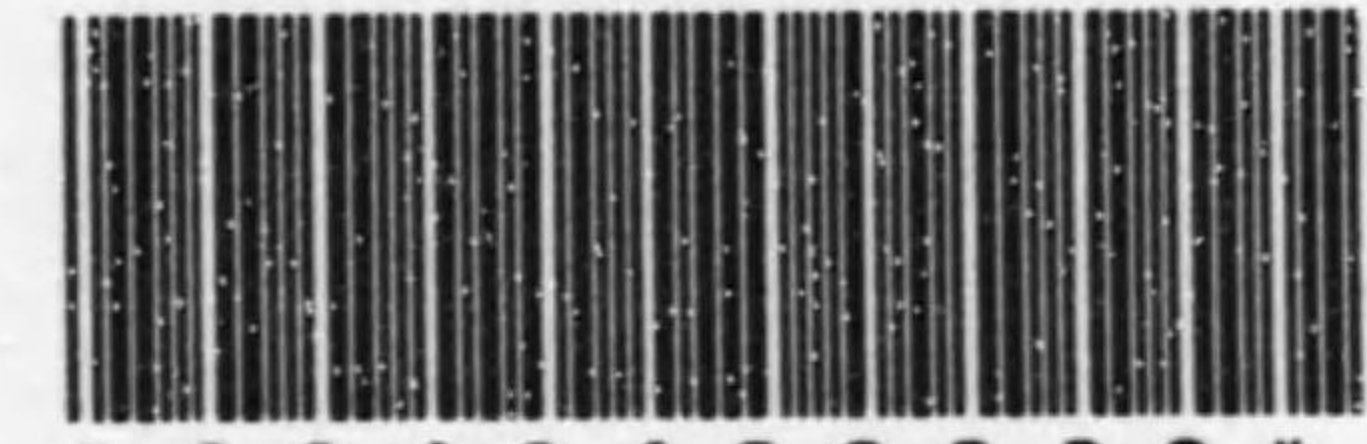


特 222

132

作文新編備考

卷 2



* 0 0 4 9 4 3 2 0 0 0 *

0049432-000

特 2 2 2 - 1 3 2

作文新編備考

光風館編輯所・編

光風館書店

卷 2

昭和 3

AHJ

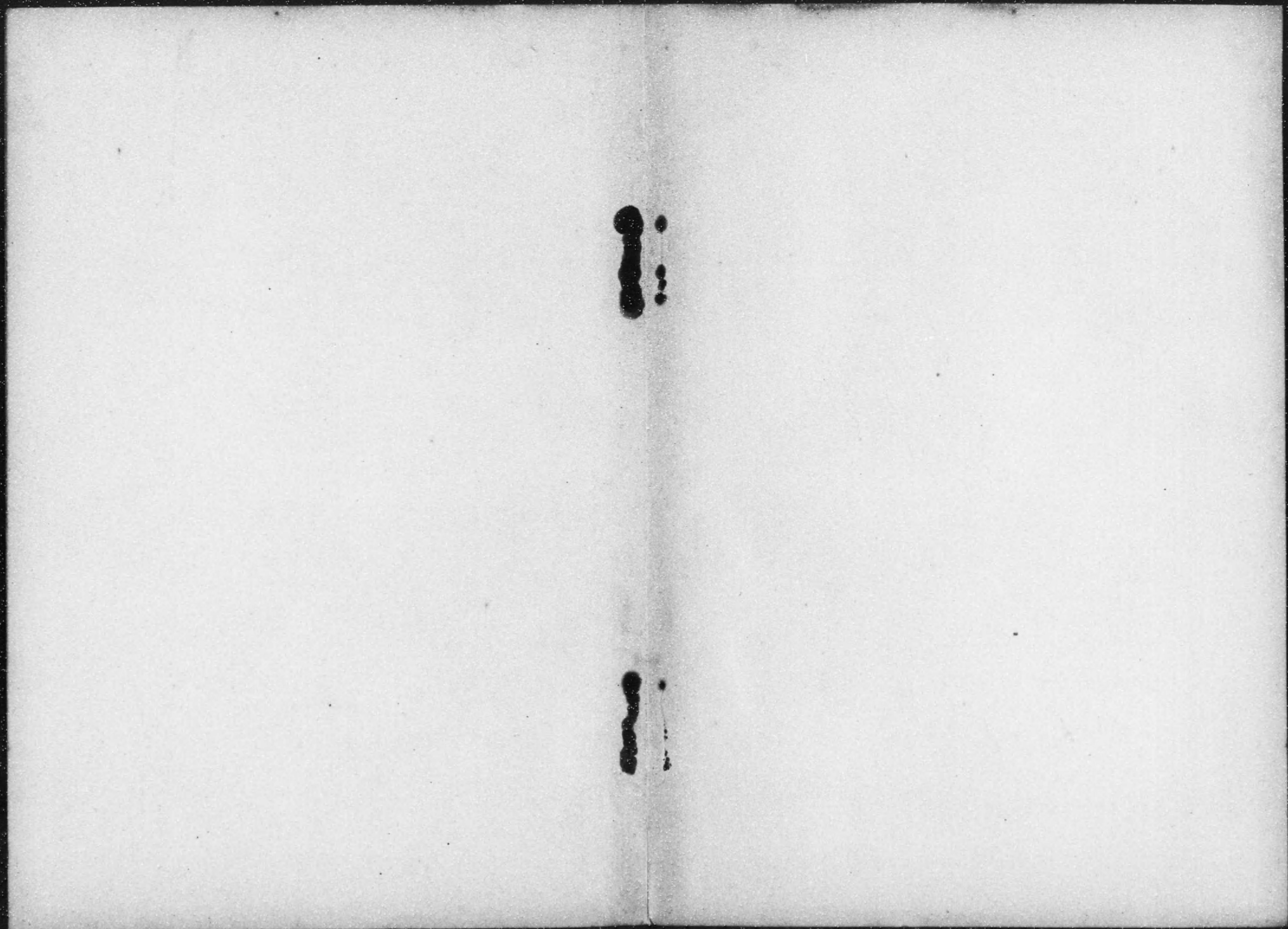
特 222

132

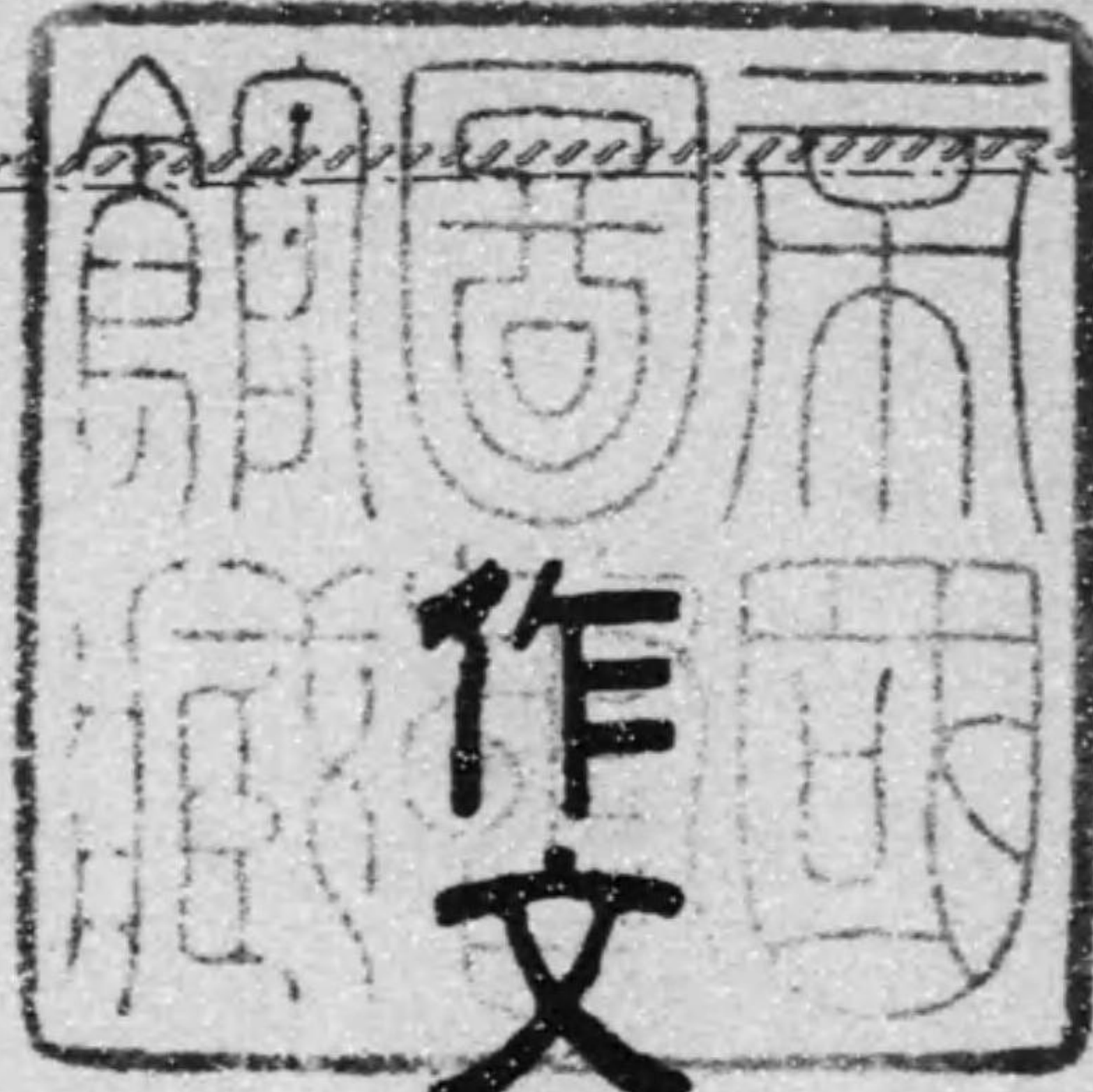
考備編新文作

二 卷

京東
行發館風光



特222
132



光風館編輯所編

作文新編備考

卷一



東京 光風館 藏 版

作文新編備考 卷二

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 一 作文の興味(自己の表現より)..... | 一 |
| 二 新學年に際して..... | 九 |
| 三 文章の良否(形式と内容)..... | 二一 |
| 四 旅行記(紀行文)..... | 二九 |
| 五 文體(口語體と文語體)..... | 三四 |
| 六 梅雨の頃..... | 三〇 |
| 七 感想文..... | 三〇 |
| 八 送り假名法..... | 三四 |

九 書翰文(手紙の書き方)……………三六

一〇 句讀法……………四三

一一 追憶の文(思出の記)……………四七

一二 年頭雜感……………四九

一三 文章の始終(行文上の注意)……………五一

一四 冬の 日……………五三

一五 和歌と俳句……………五七

附 録……………六〇

参 考 文 題……………六〇

目次終

作文新編備考 卷二

一 作文の興味 (自己の表現より)

要旨

「作文」といひますと、大多數の生徒が之を嫌ひます。此は小學校時代からの誤つた考
 が禍をして居る事が多いのではないかと思はれます。本章では此の誤つた考を除いて、
 新に作文に對する興味を起させようといふのが、その要旨であります。さてその誤つた
 考に就いては、章を改めて更に論ずるのでありますが、一體生徒の中には作文といふも
 のを、自己の生活からかけはなれた特種のものとして考へ、何等内面的要求のないの
 に、徒に、奇抜な文を作つて讀者をあつといはせなければならぬと考へたり、又は、美
 辭麗句をつらねて、好評を博せねばならぬと思つたりするものがあります。此に於て作

文は一種の虚偽の構成となり、偽善の強要となるのであります。斯の如きことは誰しも快い事ではありません。況や、純真無垢なる少年にあつては堪へ難い苦痛でなければなりません。即ち、作文に對する嫌悪反感を生ずる様になるのであります。これは作文が一學科であつて、その巧拙は成績に關係するといふところから來た弊害でありませうから、その指導よろしきを得れば、決して矯正するに難くないと信じます。そして、生徒が、文章は日常の談話と同様、自己の内的存在をその要求によつて發表するもの、即ち、偽なき自己の表現であつて、心にもない虚偽の構成ではないといふ事を悟つたなら、文章を書くことが容易になり、従つて興味も湧いてくるでせう。且、この事は、一方よく學校當局から、作文の好きな生徒は懦弱であるといつた様な非難を受ける生徒、即ち、柄にもない文學かぶれをして、いやにセンチメンタルな文章を書いて得々として居る、柔弱な一派の生徒をも匡救することが出来ると思ひます。

この指導法は教授者各位の御努力に依らなければなりません。文章は偽らざる自己の表現である。』といふ概念を、十分、生徒の脳裡に刻みこみ、更に、此の概念を基調として、批評鑑賞に進めて戴きたいと思ひます。

文の批評鑑賞は、生徒の創作欲を旺盛ならしめ、發表力を増進せしめ、文章に對する興味を益、深くせしめるものであります。殊に名文の鑑賞は、此の點に有力なものでありますから、常に名家の文章に親しましめ、之を鑑賞玩味して、如何に、眞の自己の表現である文章が、讀者に迫まるかを體得せしめ、延いて、生徒自身の文章に愛着を生せしむべきであります。此に於て文章の保存といふ考が起つて來ます。

文章の保存は大いに奨勵して戴きたいと思ひます。一つには、各自の過去の記録を尊重する所以であり、二つには、その作文の進歩の跡を顧みて、益、此の學科に興味をもつ

の助となります。

保存の方法は清書せしめるのと、添削せられたまふ之を保存せしめるのと、先づ、二方法あります。清書帳の利用は、教授者の作文整理の上へ便利があるものです。例へば、

數名宛、清書帳を提出せしめて整理して行くとか、作文の時間には、必ず、之を携帯せしめ、文章を書かせながら、教室にて、前回の分を清書帳によつて整理して行くとか、様々の利用法が有らませう。且、生徒には、清書する事によつて、その文章を推敲洗煉せしめる機會を與へることとなり、旁、有效な方法であります。添削せられたまゝの作文を保存する方法は、最も手数のかゝらぬ簡単なものであります。生徒の中には、作文を添削してかへしてもらつても、よくも讀まず、その評點でも思はしくなければ、破棄してしまふ様な者がまゝあります。此の方法は斯の如き生徒をして、何が故に、此の箇處が添削せられたかを、よく考へしめ、自己の缺點を自覺せしめる便宜があります。なほその上に、先生の添削批評に對する敬意を生せしめるものです。そして此は時々提出せしめて、檢閲する様にいたします。

最後に一寸した事ではありますが、生徒の作文に對する興味を増進するのに、比較的有力な一二の事柄を參考までに述べておきます。

その一つは、作文の時間に生徒全體が文章を書かうといふ意氣込になつてゐる時があります。この氣分を教授者は見逃がしてはなりません。何かの都合で、文話をする積りで教室に來られても、この様な氣が見えた時には、すかさず書かせる事であります。こんな時は必ずよい文章が出来るものと信じます。又その反對に生徒全體が一向氣乗りのせぬ様な有様で居る時もあります。こんな場合に強ひて書かせますと、反つて作文に反感を持たせる様な結果に陥ることが多い様です。注意すべきことゝ思ひます。

次には生徒の作品の批評添削のことですが、子供は妙なもので、褒められると、氣乗がして來て興味を起し、貶されると、嫌氣のさすものであります。奮發させてやらうと考へて、惡評しますと、思ふ様に奮發する生徒は少くて、多くは反感を持つ様になり勝です。ですから、惡文であつても、何處かよい處を捜し出して、少くとも一箇處位は褒めてやる方がよい結果を齎します。勿論、有頂天になつて、自惚を起させる様な批評は慎まなくてはなりません。

これと同じ意味に於て、時々生徒の作品の中優秀なものを、全生徒の前で讀んで聞かせることもよいと思ひます。此の場合、生徒に互に批評をさせて、最後に教授者が批評の批評をしてまとめてゆくといふ様なやり方は、生徒の批評眼を養ふといふ副利さへあつて、誠に有効な面白い方法と思ひます。

以上述べました様にして、生徒に作文の興味を深めさせ、有効な作文教授を行つてゆきたいといふのが編者の希望して居る處であります。

参考

「談話と文章。談話ならどんな六つかしい話でも立派に出来るが、筆を持つて其の通りを文章に書かうとすると、思ふ十分の一も書けないといふ人が澤山ある。一寸考へるとさういふ筈は無いやうであるが、數多ある例で、皆心理上の原因から來てをる。平生相手に向つて談話をするときには、第一その意氣込でかゝる。又談話には聲の抑揚緩急をつけて、言外に意味を強くすることも弱くすることも自由である。言葉で足らぬところは、顔の表情や手眞似などで助けて行くことも出来る。且つ談話は赤

兒の時から長月日の經驗修行が出來てゐるゆゑ、何の困難も感じないのであるが、文章となると全然勝手が違ふ。第一相手が面前に居ないから意氣込が無い、拍子がない、又慣れないために考を一字一字文字に傳へて行く間に、妙に調子が外れ、息がぬける。ぴたりと嵌る詞が出て來ない。言ひ方でも換へて見ようかと苦む。鳥渡一字度忘れをしたのも大變な妨害になつて後が悶へる。そのうちに考が立込んで來る。思想が脱線する、衝突する。頭の中が大混雜になる。無駄な骨折が多いので存外早く疲れる。大概で了はうとすると不得要領になる。簡單に切りつめようとしても、素人が植木に向つたやうで何處を切つてよいかわからぬ。下手にするとその樹を枯らして了ふ。聲の抑揚緩急、顔の表情、身振手眞似、文字の上では一切出來ぬ。頗る不自由である。そこで文章は書けないものだと思つて、他人に依頼することになる。こんな事は聰明な人にもよくある事である。されば作文自習の必要は第一文を書くことに慣れるが爲と合點すべきであらう。(芳賀、杉谷兩氏合編「作文講話及文範」)

「諸君は今まで、文章を書くといふ事が、あまりおもしろいものではなかつたらうと思ふ。作文の場合などは、おそらく、書くのがつらく、いやであつたらうと思ふ、さういふ筈はないのだが、それがその、例のうその文章や、氣取の文章を書くくせがついてるから、自然、そんな妙な結果を見るやうになつてゐるのだ。

一體文章を書くといふことは、極めておもしろいことでなければならぬ。既に、前にもいふ通り、

もと、その文章の生れでるのは、われ／＼が、ものに感じ、ものを想うた時に、それを人に傳へ、また、みづからも慰まうとしてのことである。ちやうど、頑でない子供が、うまいお菓子をもらつて、親や兄弟や、はては、友だちにまで、見せてあるいて、得意がつてさわぐのと、同じ様である。

それだもの、どうしたつて、文章を書くといふことは、われ／＼に取つて、おもしろいものでないといふわけは、決してないはずなのだ。おもしろいもおもしろい、非常におもしろくなければならぬのだ。それが今逆に、かへつて、一種の苦痛になつてるといふのは、全く、文章のその書き方を誤つてゐる爲である。心にもないことを書く、書かうといふやうになつてゐるからである。おそろしいまちがひといはねばならぬ。

諸君は、どうでも、このわるい習慣からはなれるやうにしなければならぬ。それは外ではない、ほんとの文章を書く様にするのである。して、まづ、自由に筆をはせるやうにするがよい。そこにはじめて、諸君は、文章を書くことのおもしろさを感じるやうになるであらう。すなはち諸君の文章は、その間から、自然に、そのうるはしい芽をだしてくるのだ。

諺にもいふではないか、『すきこそもの、上手なれ』と、諸君は、まづ以て文章がすきにならねばだめだ。して又、それは必ずさうなるべき筈のものなのである。〔内海弘藏氏著「文章十講」〕

二 新學年に際して

要旨

一年生が二學年に進級するといふ事は、他のいづれの學年の場合よりも嬉しいものです。して、此の喜悅は何か機會があつたら、人に話したいものです。此の氣持を捉へて「新學年に際して」といつた様な文題で書かせて見たいと思ひます。こゝにあげました作例は、何れも大して優秀のものではありませんが、子供らしい純真さが相當書けて居ると思ひます。これらの文章を読んだら、必ず、自分は更にかう考へる、かうも感ずると思ふ事が多からうと考へられます。さういふ氣分になつた時に書かせて下さい。

一體生徒の中には、題を與へられねば書けないといふ者と、自由選題を喜ぶ者とあります。併し、課題も自由選題も結局は五十歩百歩で、いづれも、自己の内的存在を發表する事になるものであります。唯、課題の方が、稍發表の範圍を限られるのみであります。

す。故に、初心者には此の方が書き易い筈であります。勿論その文題は、生徒本位であつて、生徒の生活に密接なる関係のあるものを選ばなければなりません。課題を厭ふ生徒は、自己の生活に關係の薄い文題を提示して書かされた経験がある爲か、又は、發表の型にある癖があるので、自己の好む方面の文章でないと書きづらい爲かであります。前者は問題でもありませんが、後者は如何なる種類の文章でも書き得る様修練すべきもので、却つて課題によつて書かせなければならぬ生徒です。自由題を嫌ふ生徒は、稍、思想の貧弱なものが多いかもしれません。ですから何か發表したい内的存在のある時は、自由題を希望するものです。作文は決して心にもないものを作りあげるものでないといふ事がわかつて來ますれば、課題も自由題も結局同様のものであるといふことを了解して、樂に愉快に書く様になつて行く事と信じます。

作例の取扱ひ方は教授者の御任意であります。生徒をして玩味批評せしめ、作者の作意が奈邊にあるかを推究して、自己の内的存在の發表にあたつて、その參考たらしめ

る様指導せられたいと思ひます。なほ、隨處に極めて卑近な誤り易い假名遣を欄外にあげておきましたから、生徒をして、自分の文章にかゝる誤のなき様注意せしめられたいと考へます。最後の短評は批評の一例といふ位の考で附け加へたものでありますから、教授者にあつては、生徒各自の批評を綜合して最も適當な批評を下されるべきであります。以下本卷を通じて、作例に對する考は同様であります。

三 文章の良否 (形式と内容)

要旨

文章の良否は形式と内容の兩方面から考へることが出來ます。併し、その本質から見、内容が本であり、形式が末であるのは云ふまでもありません。内容の深い文章は、その形式に多少の缺點が有りましたも、讀者を動かす事は大きいものであります。嘗て賀川豊彦氏著「死線を越えて」といふ書物が、その形式は誠に整はぬ——どちらかとい

ふと寧ろ讀みづらいといつてもよい文章であるにかゝはらず、非常に讀まれたといふ事は、その内容に見るべきものがあつたからでせう。故に先づ生徒の思想感情を豊富にする様導くことが、よい文章を書かせる最大原因であります。ところが多くの生徒の最も陥り易い弊は、形式に捉はれるといふ事でありませう。此は前にも述べました所で、上手だと思はれたといふ様な氣持が禍してゐるのでありますから、「どんな文章がよい文章か」といふ事を、確かに生徒の腦裏に刻み込んでやらなくてはなりません。

此の目的から、

- 一 心にもないことを書くな。
- 二 言葉を銜ふな。
- 三 筋の通つた統一のある文章を書け。
- 四 生々とした力強い文章を書け。

といふ四つの注意を掲げました。第一項は、文章は自己の内的存在の表現であるといふ

事が、十分了解出来れば心配のない注意であります。併し、生徒の多くは、作文とは文章を作るものであるといふ様な誤つた考に捉はれて居ます。その爲に、内的に存在せぬことを作りあげ、感情を偽るのであります。

第二項の注意はやはり前述の上手だと思はれたといふ氣持から生ずる弊に對する戒であります。自己の思想感情を最もよく最も多くの讀者に會得せしめる言葉は、日常最も普通に用ひられてゐる言葉であるといふ事がわかれば、こんな弊に陥るものはないのであります。この意味から美文の如きものは、初心者には要求すべきものではありません。

第三項は、何でも長い文章をよい文章と考へて、同様の事を繰返し、くどくだらぐと、まとまりなき文章を書く生徒に對する注意であります。文章を書く場合には、先づその書かうと欲する思想をまとめ、腹案を作り、必ずその要項を書いて順序を考へ、然る後に筆をとる習慣をつくらねばなりません。何等考をまとめる事なく、直に筆を下す

如きは、多く、だらしなき不統一な文章となります。生徒の中には思想の取捨選擇をせず、少しも題意に關係なき事柄をも、之を惜んで捨てず、爲に整はぬ文章を書いてしまふ様な者も少くありません。簡潔にして明瞭といふ事は、文を書く上に於て重要な項目であることを忘れさせぬ様にすべきであります。

第四項の注意は、即ち、文章は自己の表現である、従つて少年は少年らしい文章が眞の文章で、いやに老成ぶる様な事のない様注意するのであります。ここに於て、生々した、元氣潑刺な少年らしい文章をよい文章とするのであります。

さて生徒の中には、發表すべき内的存在を持ちながら、何と書いてよいかわからないといふ種の者があります。此は思想感情を文字に翻譯する（語弊があるかも知れませんが）修練が積んで居ないからであります。斯の如き生徒には、多作を奨励すべきで、之によつて終には容易に發表し得る様になります。此の多作に最も都合のよいのは、日記を誌す事であります。日記は多作以外に、種々の利益のあるものであります。その誌

し方によつて、つまらぬ勞力とならぬとも限りませんから、十分、御指導を願ひます。

次に生徒の中には、何を書いてよいか、少しも書くことがないと言ふ者も尠くありません。此は思想感情の貧弱な生徒であります。何と言つても文章はその内容が第一であります。此に於て、思想感情、即ち内的存在を豊富にするといふことは、最も重要な事柄であります。思想感情を豊富にする爲には、先づ、讀書、觀察、思索、想像等を考へなければなりません。併し、その讀書にしても、濫讀であつてはなりません。熟讀玩味をしたならば、唯單に知識を増進するのみならず、作文上に偉大な効果のある事は勿論の事であります。觀察も不正確なものは何等益するものではありません。正確な緻密な觀察は、所謂「百聞一見に如かず」といふ諺の通り、吾々に具體的の知識感情を與へるものであります。次に思索といふ事は、中々生徒には出來にくい事かもしれませぬが、之によつて、讀書觀察から得た知識感情を眞に自分のものにする事になるのであります。是非この習慣をつける様指導すべきです。最後に、想像力を増す様努むべきであ

ります。此の想像力の乏しい者は、折角得た思想感情を活動せしめることが出来ず、従つて奥行の深い文章を書くことが出来ぬ様になります。

かく豊富な思想感情と、自由自在な發表能力とを持ちましたら、文章を書くことが容易になり、讀者を感動せしめるに足る立派な文章が、思ふままに書けることとなりませう。

参考

或中學校の卒業生が、「中學生生活の回想」といふ課題に應じて作つた文の中に、次の文句があつた。今や、吾人の現状より、人たる者の經歷に深く研究の歩度を運び來たる時は、眞か偽か善惡悉く雲合し、一體の現象を呈出して、造化の眞髓妙はた奇に至つて止む。仰けば風雲際會して一路の明、今何處にか求めむかと案ずるの時、東天暗を破りて吾人を導く者は、抑々五尺の小軀に隠蔽せられたる一寸の赤心に作用する魔力の、時に陰時に陽たるの如きか。」

某縣師範學校の卒業式にある名士の朗讀した祝文の一節に、「知識は正皓を失し、禍福を超脱し、人

材出沒す。」

といふ句があつた。某村長が農學校の開校式に讀んだ祝文の中に、次の文句があつた。

「春風天々春雨札々の候……學校開校式を擧ぐ。何の幸か之に如かむや……夫れ農は國を富ますの本也。軍備擴張も之れに起烟す。信なる哉、信なる哉、聊か無事を述べて豈に夫れ祝詞を買ふと爾云也。」

名文は凡ての人の書きたいと願ふ所であるが、文を正しくする方の基礎を固めずして、漫りに名文にあこがれると、なり損ねるお化文章が出来上がる。形容修飾は文を美にする道具ではあるが、用ひ方止の宜しきを得なければ、却つて識者の物わらひになる。くれぐれも文章は先づ正しくなければならぬ。正しい文章にいろいろの形容修飾が加へられて、始めて名文といふものが出来あがるのである。(五十嵐力氏著「修辭學大要」)

思想を明らかに寫すといふ中でも、先づ第一に必要なのは、明らかに知つて居る事を書くといふ事である。書くだけの事は、心の中で十分に考へ纏めて、さて後に筆を執れといふ事である。十分に理解して居る事ですら、明確に書き表はすのがむづかしい。まして一知半解の事の明らかに書けるわけがない。(同書)

相手を見ての筆加減に三方面ある。第一は通俗なる語を用ひる事である。第二は簡易に言ひ表はす事である。第三は周到に言ひ表はす事である。(同書)

何時如何なる場合にも、何人に讀ませる文章に於ても、常に必ず守るべき事が三つある。それは第一に秩序、第二に連絡、第三に統一、この三つである。(同書)

信州の小諸に居た時分、私は弓の稽古をしたことがある。誰でも、最初の中は的に向つて矢を中てることばかりを心がける。「唯中りさへすればい、」かう思ふ時分には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に中つた矢は、徒に煩い高慢な「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場に來た。其の老人は、先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それから私達の矢は、たとひ的を貫くことが出来ない様な場合でも、一手揃ひで、同じ場所を行くやうになつた。これは文章の道にも當嵌めて見ることが出来る。唯好い文章ばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。真に好い文章を作らうと思つたら、どうしても先づ「自己」から正してか、らねばならない。(島崎藤村氏著「飯倉だより」)

四 旅行記 (紀行文)

要旨

春四、五月の交には多くの學校に於て、遠足や修學旅行が行はれます。此の機會を利用して、紀行文を修練せしめようと思ひます。生徒にとつては、遠足とか旅行とかいふ事は、學校の年中行事の中で、最も楽しい事件でありませう。如何なる生徒も此の日を千秋の思で待つて居るものです。しかし、之を單に、愉快的思をさせるだけの遊山に終らせてならぬは勿論、旅行、遠足の本來の目的以外、更に作文の上に利用すべきであります。それで、豫め、その旅行又は遠足せんとする土地に關する豫備知識を興へ、又は、研究せしめておき、且、觀察の仕方、感じ方等を指導して、實際旅行遠足に當つて手ぬかりの無き様にすべきです。一體、紀行文は實際見聞して來た事柄を、偽らず飾らず書くだけのことで、それ程工夫もいるものでなく、又他の種類の文章と、書く上に於

ては、大きい差違のあるものでもありません。唯、生徒は材料の取捨に迷ひ、順序を亂し、統一なきだらうと緊張味のない文を書き勝てありますから、注意して指導すべきであります。なほ、紀行文は徒に事實の羅列に墮して、無味乾燥な文に終る事もありますから、相當その指導には骨が折れることゝ思はれます。

最後に斯の如き長くなる傾のある文章は、學校では單にその指導や注意に止め、宿題として家庭で書かせた方がまとまり易からうかと思ひます。すれば、十分推敲洗煉もゆきとゞき、後のよき思出の種となりませう。併し、部分的の紀行文を即題として書かされるのも結構な事であります。

なほ此の章は、遠足、旅行の秋季に行はれます學校では、適宜繰り延べられる様願ひます。

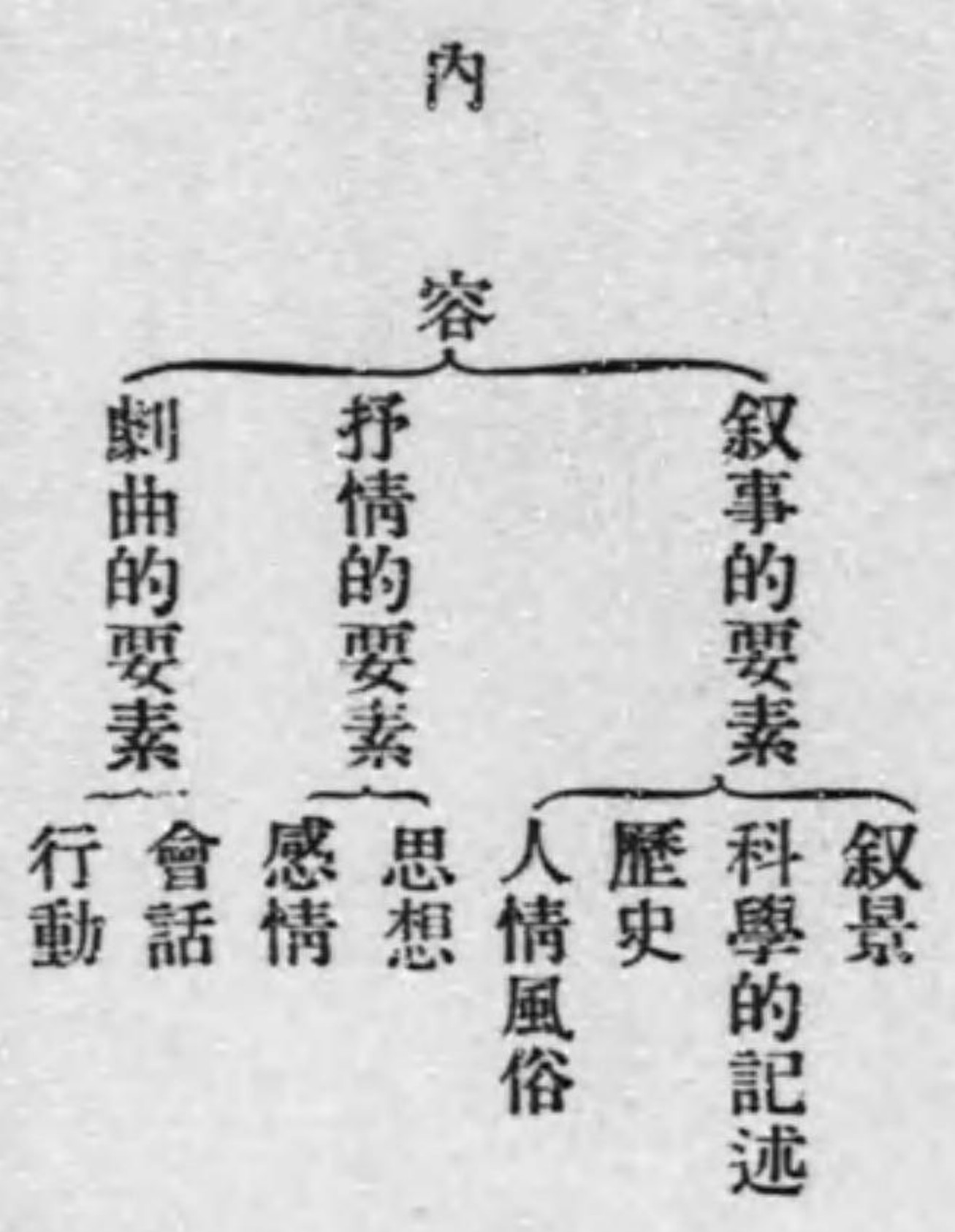
又例の取扱方は、旅行記の一般注意を與へられた後、熟讀玩味せしめ、その巧拙を批判せしめ、各自の作文上の参考に供せしめられたのであります。唯、「水前寺に遊ぶ

記」は文語體でもあり、稍大人びた文章でもありますから、生徒の参考には不適當かも知れません。併し、此の文によつて、推敲の如何に必要であるかを考へさせてほしいのであります。

なほ、名家の此の種の文章を適當に示され、之を鑑賞せしめられる事は極めて有効の事であります。卷末に附録として添へました蘆花氏の手紙は、形式は書翰文ではありませんが、また紀行文として立派なものでありますから、採つて以て模範文とするに足りません。

参考

紀行文の内容は、見聞したる事物と感受したる感想との二を以て組成せられたるを知るを得可し。今これを表に依りて示せば、



の如く、叙事、抒情、劇曲の三要素相寄りて、紀行文を組成せるものなり。然れども一の紀行文には必ず右の三要素を具備せるにはあらず、或は二を有し、或は單に一を有し、或はまた三を併有せるものもありて、區々一定することなし。(西村眞次氏著「紀行文作法」)

叙記の様式は、之を左の數種に區分することを得べし。すなはち、

- 一、日記式
- 二、書簡式
- 三、自叙式

四、他叙式の四種となす。

日記式といふは、日記の例式にならひて、叙述したるもの、言換へて云はゞ、紀行したる事柄を日記のやうに見せかけて書くものなりと云ひ得べし。かくの如き例は昔のにはいと多かりしが、今日に在つては少し。

書簡式といふは、作者が紀行文を作るに當りて、書簡を認むるやうなる形式を執るものとす。新聞紙などに旅行先より送附し來りたる記者の紀行文を載することあり。その中には往々にしてかくの如きを觀る。日記式に比ぶれば、此の様式は頗る主觀的にして、自己の想情を述ぶるに適すれど、客觀の側を忘れて、叙景、叙事を忽かせにすることなきや。これ大に注意して、警戒を加へざるべからざる點なり。

一般の紀行文は殆ど自叙式なり。自叙式と云ふは、作者自身が主人公に成りて、自らなしたる行動會話、見聞したる風景人情等を其の儘に叙述するものとす。紀行文はおほむね此の様式に依れるが多く、又最もこれを正しとすべし。

他叙式といふは、全く客觀的なり。他人が旅行して、山河の風景を見聞し、人情風俗を觀察し居るやうに書き綴る様式にして、かくの如きは其の例少し。(同書)

五 文 體 (口語體と文語體)

要 旨

生徒の用ひる文體は、主に、口語體であつて、之には既に慣れて居ませうが、文語體の文章は、國語讀本その他で、讀むことは多からうが、書く事にはあまり慣れて居るまいと思はれます。故に、文語體の文章は書きづらく、又誤を生じ易からうと思ひます。因つて本章では、此の兩文體の異同を教へ、その特徴を知らしめようといふのが主眼であります。

實際實用としては今日では殆ど口語體の文章だけで、十分、事たる事と思ひます。併し文語體の文章が全く書けないといふ様な事でも困ります。殊に書翰文などでは、文語體の一種である候文が、まだ相當用ひられて居りますから、一通りは文語體の文章を書く練習が必要であります。

初心の生徒が文語體の文章を書きます場合、最も陥り易い弊は、口語及び文語の兩體を混雜する事であります。此の頃の文章の傾向としましては、口語體の文章には、聞き苦しくない限り、文語體を混入してもかまはぬ様であります。勿論、一文の(一篇の文章といふ意味ではありません。文法に所謂「文」の意味です。)終りの様な場所には、文語體を用ひてはなりません。併し、初心の生徒には、絶対に、兩文體の混合を許さぬ方がよいと考へます。殊に文語體の文章には、如何なる所にも、口語體を混入することを許しませぬ。それは文語體の語調を害ふ上からと、誤を生じ易い爲からとだけでもよろしくありません。但、ある修辭の上から、特に兩文體の混合をする事がありますが、此は出來あがつた人の事で、生徒などには許すべからざる事であります。夏目漱石氏の文章などには、此の種のもの中々あります。

次に最も誤り易いのは、助動詞「ぬ」であります。文語の完了の助動詞「ぬ」と口語の打消の助動詞「ぬ」とは、その終止形が同形でありますから、例へば、「夜も明けぬ。」といふ

文は、文語であれば、「夜も明けた。」といふ事であり、口語であれば、「夜も明けない。」といふ事でもあります。斯様な誤は、口語文語の兩文體を混雜しておけば、始終起り勝の事でもあります。

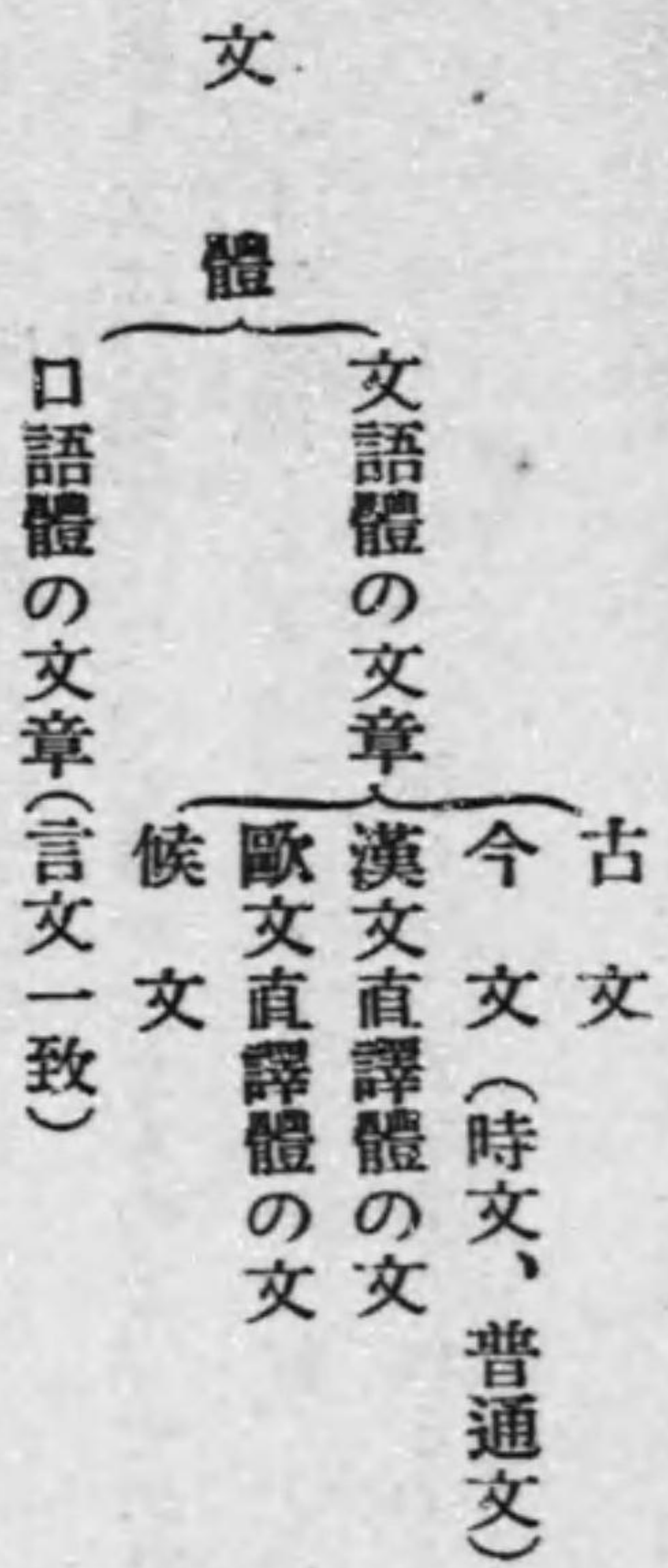
生徒をして文語體の文章に慣れしめる方法は、改作文が最も手近な方法でありませう、即ち、ある口語體の文章を文語體の文章に改めさす方法であります。文語體の文章を口語體の文章に改める事は、國語讀本などの講讀の場合始終試みる所であります。口語體を文語體に改める方はあまりありません。此によつて兩文體の異同が、生徒の頭腦に明確に入つて來ます。この機會に、文語文法と口語文法との差異を教へられたら有效でせう。

最後に、別方面から、文體に敬語體と常語體とのある事に注意して、敬語の用法を指導して戴きます。殊に敬語は、口語に於て複雑でありますから、時間に餘裕があつたら敬語法の大體を教へられたら更によからうと思ひます。此の事は、後章の書翰文に大關

係のあるものでありますから、それと相關連して、適宜指導せられる事を希望いたします。

参考

今諸文體を表で示すと次のやうになる。



そのうちわれ／＼に必要なのは、文語體の方の今文と候文と、そして、口語體の文章とである。今文はもと鎌倉時代の軍記物にはじまつて、江戸時代に大成され、更に、明治に至つて整頓された文章である。

で、はじめは、和漢調和體とか、假名交り文とかいはれたものである。今日でも、まだ假名交り文といふ人があるが、よくない名だ。

候文といふ文體も、鎌倉時代に行はれた、特殊の文體で、今日では、書翰文や、届書證書類などの文章の上のみ限つて用ひられてゐる。

口語體の文は、明治になつて開かれたもので、そのはじめは、小説家が、小説の上に用ひたもの、して又その上で發達したものであるが、今日では、どの種類の文章の上にも用ひられることとなり、議論文のやうなものまで、立派に、これで書かれるやうになつた。(内海弘藏氏著文章十講)

用語の上より文體を別つときは、一、漢文體、二、和文體、三、言文一致體の三種に區分することを得可し。

漢文體といふは、漢語の分子多き文章にして、その質堅き方に屬せるものとす。その特長は、簡潔にして要を得るに在り。これ其の一。剛健にして莊嚴を謳ふに適せるに在り。これ其の二。

此の二點より見るときは、漢文體は必ずしも非難すべきにあらざるも、難解晦澁の嫌あり。殊に今世には忘れんとする廢語同様の語句もあれば、かくの如きは必然除却すべきなり。

和文體といふは、用語に雅言脈の多きものなり。その特長は口調の流麗にして、沮滯せざる點にあ

り。句意の幽遠にして、緊束せざる點にあり。されば、優柔、纖弱の思想を寫すに適し、剛健、崇壯の思想を描くに適せず。

言文一致體といふは、口語、即ち吾人が日常談話に用ひる言語を以て綴りたる文體なり。これを他の和文體、漢文體に比較すれば、その理解の難易、口調の差異を發見するに難からざる可し。殊に言文一致體に在りては、描寫も緻密に出來、思想の複雑なるものも充分これを表現することを得るを以て簡疎なる和漢文體よりも有益なることは、嗚々の辯を費さずして明瞭なることなり。今その弊とも云ふべきものを擧ぐれば、

- イ、冗漫に流れ易きこと、
- ロ、没趣味に陥るの恐れあること、
- ハ、餘韻を失ふこと、
- ニ、平板に流れ易きこと、
- ホ、乾燥になる恐れあること、
- ヘ、露骨に失すること、

の六種あり。故に吾人は常に心を此の點に止めて、これ等の惡弊に陥ることを防ぐと同時に、更に雅文漢文中より長所を吸入し、咀嚼し、以て言文一致體を裝飾するの具となさざる可からず。

六 梅雨の頃

要旨

梅雨期は生徒の生活には幼少の時から種々関係のあるものでありませう。かういふ關係の深いものに對しては、自然各自の心の中に、相當の此れに對する感想が生じて居る事と思はれます。それを書かせて見ようといふのです。なほまた、梅雨は細かに觀察し、よく味へば様々の趣のあるものであります。此の特種な時期に當つて、一方觀察眼を養成して行かうと思ふのであります。

七 感想文 (感想の涵養)

要旨

何を見ても、何を聞いても、それを味ふでもなく、考へるでもないといふ様な性質の生徒があります。こんな生徒は深みのない文しか書けませぬ。此は一面には、さうした習慣を養はない爲の結果でもあります。そこで此の感想の涵養といふことが必要となります。一般に日本人は哲學のない國民であるなどといはれてゐ、甚しきに至ると、日本の飛行機がよく墜落するのは、この國民的缺陷からであるときへいはれて居ります。吾々はこの汚名を雪ぐ爲に、よく考へ、しみじみ感ずる習慣を養つて行かなければなりません。昔から、喜怒哀樂を色に現はさないのが、英俊であると考へられて居ますが、喜怒哀樂を感じないのがえらいとは考へられて居ません。生徒をして此の點を明かにせしめ、思想感情を養つてゆく習慣をつけさせなければなりません。此の根本さへ出来れば感想文は易々と書き上げる事が出来ませう。ここに感想文の練習を出しましたのは、寧ろ、この思想感情を涵養する爲の方便であると考へられて差支ありません。

一體感想文といふのは、純粹な感想ばかりを書くものではなく、様々の叙述の中に、

感想の部分が比較的多いといふものをこの種の文としなくてはなるまいと思ひます。従つて例示しました文例には、色々の文章が混じて居ります。此は教授の際に適宜説明せられたいと思ひます。

参考

感想文とは感想の叙述を主眼とせる文章を云ふ。描寫はいつも観る——描くといふ態度であつて、それに附け加へる感想も、感想そのものを述べるが目的ではなくして、描寫の氣分を濃くし明らかにするの目的である。しかるに感想文に於ては常に感ずる——述べるといふ態度であつて、感想そのものの表現が主目的である。そしてこれに描寫が伴ふ場合もそれは感想を述べんが爲の描寫であつて描寫それ自身が目的ではない。(吉澤義則氏著「現代作文」)

胸に涌いた感想が澤山に、ごたく／＼としてゐて、いかにもまとまりがつかない。もしそれをそのままに書きあらはしてしまふと、その文章は、必ずごたく／＼した、しまりのない、して、どこにその主題があるのだか、わからないものになる。いひかへれば、甚だ明晰ならざる文章が出来る。これでは

こまる。で、こゝに、何とか、工夫せねばならぬ必要を見る。

感想の一致といふのは、すなはち、この弊に陥るまいといふ上の用意である。すなはち、ある題目についての感想が、ちやんと、一つの方途にまとまつてゐる。——そのいろいろの感想の間に、ちやんと、脈絡があるやうにまとまつてゐるといふことなのである。(中略)

そこで感想の割愛をして、自分の最も、最も感じたものだけを取るやうになる。——即ち、感想を簡明にするのだ。そして、これを十分にあらはすのだ。

して、その取舍選擇といふ上の苦心がまた、われ／＼の感想をまとめるのに、い、力を與へてくれるやうになるものである。(内海弘藏氏著「文章十講」)

八 送り假名法

要旨

送り假名法には定説がないと思ひます。併し、何かに因らなければ滅茶苦茶な文章が出来あがり、従つて十分自己の思想感情を讀者に會得せしめることが出来ません。元來

送り假名と云ふものは、漢字と假名とを交へて用ひるところから生ずるものでありまして、誤りなく自己の意志を人に傳へることが出来る様に、文字に書き現はされ、ばよいのであります。こゝに挙げました法は、最も常識的なものであります。文法上の用語を使用しましたから、二年生には多少わかりにくいかと思はれます。もし二學年で文法を教授せられない學校でありましたら、適宜上級學年におまはし下さい。そして、此の場合、なるべく假名を多く用ひる様にお奨め下さい。なほまた、漢文の送り假名と聯關して、適當の指導をせられ、送り假名の不完全な爲に、意味の不明を來すといふ概念を擱かまされたいと思ひます。例へば、

我國家の前途を憂ふ。

といふ文は、「われ國家の前途を憂ふ。」と見るか、「わが國家の前途を憂ふ。」と見るか、誠に曖昧であつて、作者の意志が誤り傳へられる事が多い。こんな場合には、宜しく、「我れ」とか、「我が」とか、或は全部假名で「われ」「わが」と書くべきであるといふ様な例

をあげて送り假名の決して忽せにすべからざるを徹底せしめたいと思ふのであります。

この送り假名の問題はわが國字整理の上にも大關係のあるもので、益々研究せられて完全な「送り假名法」が早く出來あがつてほしいものです。

参考

送りがなの法は文法の知識と相俟つて知るべきものであるけれども、第一讀みよくすること、第二無駄な假名は書かぬやうにすること、この二つを原則として注意して書けば、大したまちがひは無いものである。(友田宜剛外二氏共編「新體中等作文」)

送假名の附け方について、今の所學者界にも、一般社會にも、別段これといふ定説はない。結局分りさへすればそれでよいといふ事になつてゐる。嘗て文部省國語調査會から、其の大體が發表せられた事もあるが、その通り世の中で使つてゐるといふでもなく、その通りでなければ分らぬといふでもない。同じ送假名にしても、動詞や形容詞の活用の如く、「思ふに」を「思に」としてはならず、「美しく」を「美く」と書いてはいけないといふ類もあれば、「之を」と「之れを」、「其に」「其の」の如く、どち

らにもそれ相當の理由があつて、結局どちらでもよいと考へられる類のものもある。どちらでもよい事を無理にどちらか一方に片附けるにも及ぶまい。(塚本哲三氏著「作文學び方考へ方作り方」)

九 書翰文 (手紙の書き方)

要旨

書翰文が我々にとつて、如何に實用的の文章であるか。随つて、如何に必要な文章であるかといふことを知らせ、且、書翰文に馴れるといふことが、他の文章を書く上に非常な利益のあることを考へさせたいと思ふのであります。

生徒は一般に手紙を書くことを厭ひます。それは學校で作文の時間に書くものは、多く、必要に迫られて書くのでないからであります。一般の文章であれば、已むに已まれぬ内面的要求がなくとも、讀者が漠然として居るから、自己の良心をこまかすことが樂であります。手紙となると、特定の讀者がありますから、ほんとの文章を書かなくて

は、良心の呵責を感ずることが大きく、随つて、彼等にとつては誠に書きづらい文章となるのです。何か知らすべき重大な事件はないか、何か告ぐべき緊急な用事はないか、と捜さねばならぬ様な氣になるから、苦しいのです。そこで、手紙といふものは、何もそんなにむづかしいものではない、やはり自己の心にある事柄をそのまま書けばよいのである、といふことを十分よく會得させなくてはなりません。それがはつきり了解できれば、漠然とした讀者に對してより、一定の讀者に對しての方が、ずつと書き易くなると思ひます。

以上書翰文の形式について、一般の知識を授けたいと存じます。併し生徒は存外單純な考よりもつて居りませぬから、手紙といへば、かういふ形式によらなければならぬと考へ勝であります。故に、決して形式に拘はれない様に指導せねばなりません。相手と場合を考へることを忘れない様に注意し、それに因つて夫々適當に運ぶべきことを知らせたいと思ひます。

候文體の手紙に就いては、今日だん／＼用ひられる範圍が狭くなつて來ましたが、公文等には今なほ此の文體の文が正體の様でありますから、一通りは承知して居なくてはなりません。此の意味に於て一般の注意を與へたいと思ひます。そして此の文體に馴れしめる爲に、改作文、即ち、口語體の手紙を候文體の手紙に書き改めさせる事を時々行ひます。

最後に手紙の文で注意すべき事は敬語であります。敬語については、此の際十分教へていたゞきたいと思ひます。そして、むやみに敬語を用ひる事が決して禮を盡す所以でない、相手の身分を十分考へて、適當な言葉遣をしなければならぬ、といふ事を知らしめます。

更に、教科書には書きませんでした、手紙の書き方を教へてほしいと思ひます。用箋にペン書の例は、卷末の附録に添へておきましたから、それを適宜使つて下さい。巻紙に筆で書く方は、何かよい手本を示されて、前後のあけ方、天地のこと、墨色、墨の

つぎ方、先方の名を行末に書かぬこと、御等の敬語を行末に書かぬこと、先方の名を二行にわけぬこと、熟語はなるべく二行に跨がらせぬこと、候等の語を行初に書かぬこと、文字をわかりよく書くべき事、日附の書き方、當方の名は姓だけを書かぬこと、(但し、同輩及同輩以下の人に送る手紙は姓のみでもよい、身分の上の人に送る場合は名のみか、姓名を書くかする。)先方の名は名のみ書かぬ事、(但し、同輩以下ならば書いてもよい、貴人に送る場合は姓のみか、姓名を書くかする。)連名の場合は、當方は主となる人を最後に書き、先方は主となる人を最初に書くべき事、起首及結尾の事、脇附の事、巻紙の巻き方、(文字を中にして終りより巻き、先方の名を折目にせぬこと)封筒への入れ方、(逆にならぬ様、巻き初めを表にして)封筒の書き方、(住所姓名を明記すべきこと、當方の住所姓名をも必ず書くべき事)切手の貼り方、(左上肩に、逆にならぬ様、斜にならぬ様、正しく貼るべき事等を教へて戴きたいと思ひます。

模範文及文例は前章の例に倣つて、適宜御利用下さい。

参考

一筆啓上火の用心、お仙泣かすな、馬肥せ。(本多作左衛門)

手紙は人と人との間に於ける直接の對話とも見るべきものであるから、手紙に関する色々な禮式は昔からやかましく云はれて来た。手紙が一定の形式にはまらずに、今日の如く直截にその心の中を通じようとするに至つては、對手と云ふ感じが一層深くなつて来た。従つて禮容と云ふやうな事に對しては、細心の注意を拂はねばならぬ。一體世の中の相と云ふものは昔と今とでは著しく違つて来たけれども、禮式と云ふものはいつまで経つても、さほど變化するものではない。それ故、手紙の禮式も殆ど昔に變らない。たゞ巻紙に筆で書く代りに用箋にペンで書く事が多くなつて来た爲に、勢さう云ふ方面の注意が増して来たくらゐのもので、その他の點に於ては、全く昔のまゝである。(吉澤義則氏著「現代作文」)

起筆(「一筆申上げます」の類)

前文 時候(「まことに御寒うございませう」の類)

安否 先方(「皆様お障りもございませんか」の類)

當方(「こちらは御蔭様で一同無事でございませう」の類)

本文(用事・用件を述べる。)

末文 收結(「それでは何分お願ひいたします」の類)

結尾(「さよなら」「早々」「かしこ」の類)

(友田氏外二名共編「新體中等作文」)

- 一 あまり形式にかゝはつてはいけぬ。
- 二 ほどを得るやうにするがい。
- 三 場合を見はからはねばならぬ。
- 四 わかりやすいやうに書け。
- 五 簡潔をむねとするがい。
- 六 情をつくさねばならぬ。(内海弘藏氏著「文章十講」)

- 一、親しきには、くつろげるをよしとす、しら／＼しかるべからず。
- 一、親しからぬには、懇なるをよしとす、なれ／＼しかるべからず。(同書)

實用向きの手紙は、まづ大別すれば、他に或事を知らせるもの、他に頼み勤めるもの、吉凶につい

て喜び悲しみを述べるもの、此の三つとなる。而して此の三種にそれぐ必要なる注意を擧げると、報知の手紙に大切なるは、用事を明瞭確實に傳へることである。依頼の手紙に大切なるは、心の底を打ちあけて我が誠意の徹するやうにすることである。慶弔の手紙に大切なるは、先方に同情して安慰を與へることである。無論、相手との關係に應じて、禮を失はぬやうにすることが、三種に通じて必要なることは云ふまでもない。(五十嵐力氏著「中等新作文」)

一〇 句讀法

要旨

生徒の作文には、句讀點をはつきりつけさせたいと思ひます。句讀のきり方によつて文意の變ることがある。随つて、作意を十分讀者に傳へる爲には、句讀を明確にする必要のあることを知らせたいと思ひます。

句讀法は文法の文章篇を知らなくては、わかりにくいものと考へられますから、本章では、唯例をあげて大凡のところを、會得させて行かうと思ひます。

左に極めて一般的な法則を載せておきます。

句點を附すべき場合。

一 文の終り。

例 圖らざりき、君と此處に相見んとは。

二 提示部の終り。

例 太郎よ。早く行け。

注意 此の場合には讀點を用ひることもある。

三 引用文の終り。

例 都のことども心にかゝること多かりしかば、明日出で立たむと、その旨父君に乞ひしに、「わが病は心づかひすな。はや歸れ。」とのたまふ。

讀點を附すべき場合。

一 被述部と叙述部との間。

例 納税を怠りたるものなきことは、村役場にて問はせ給はば明らかならむ。

注意 被述部及び叙述部が簡単な場合は、讀點を附せないでもよい。

櫻咲く。

二 同一の被述部に對して、並列的に二つ以上の叙述部がある場合は、その叙述部の間に。

例 太郎は、書を読み、字を習ふ。

注意 此も簡単な場合は附せずともよい。

三 同一の叙述部に對して、並列的に二つ以上の被述部のある場合は、その被述部の間に。

例 紫式部の源氏物語、清少納言の枕草紙は、平安朝文學の双壁と稱せらる。

四 修飾語が並列的に二つ以上、同一の語にかゝる場合、その修飾語の間に、

例 長閑に、華やかに、春の日は明けぬ。

五 修飾語が他の語を隔て、或る語にかゝる場合には、その修飾語の終りに。

例 おのづから、己、僧だちの顔なども見知りぬ。

六 重文の場合は、節と節との間に。

例 松青し、砂白し。

七 文の成分が倒置せられた場合は、その倒置せられた成分の終りに。

例 思ひきや、雪ふみわけて君を見むとは。

八 副詞及接續詞等にて、二音のものを漢字で書いた場合は、その語の次に。

例 兄弟は、猶、両手のごとし。

以上にて大體盡くしたと思ひますが、なほ、複文重文の複雑なるものになると、適宜、意を誤り傳へぬ様に、附すべきものがあります。

参考

現今行はれてゐる句讀法を見ると、大體舊式、普通式の二つがある。

舊式とは、舊國學者、即ち古文學者の用ひる句讀法で、大槻文彦氏著「廣日本文典」に法を示してある通り、極端に細かに打つて行く方で、權田直助氏の研究「國文句讀法」ともほぼ一致してゐる。そこで、小學校の初年級の讀本などには、兒童の息も短し、且つは句と句とを成るべく分けて讀ませたいといふ趣意から、この句讀法が行はれた。語句の離合の上からいへば、これが一番精密な句讀法であるが、これでは餘り親切すぎて却つてうるさいところから、これを今少し省略した句讀法が今普通に行はれてゐる。これを普通式といふ。

この句讀法は、文法上でいふ所の一句一句に「、」を打つといふよりも寧ろ思想上密接した若干の句の間には「、」を省き、それをまとめて一つの大きな句となし、他の大きな句との間に「、」を以て界をつけるといつた様な鹽梅である。即ち、西洋の「・」の處には「。」を用ひるが、西洋の「・」の處では場合によつて「、」を用ひたり「。」を用ひたりする事になる。それから「、」の處は多く「、」を用ひ、時としては省略する。

要するに日本の文章で句讀法を一口に説く事は甚だ仕にくいが、作文家は今の模範となるべき文章について、注意して讀んだら、直に理解が出来ようと思ふ。たゞ句讀の有無によつて意味の差を生ずるやうな個處には特に注意を忘れてはならぬ。(芳賀矢一、杉谷代水兩氏合編「作文講話及文範」)

一一 追憶の文 (思出の記)

要旨

追憶の文は、過去の自己の歴史を書くといつた様な文章であります。仍つて割合に生徒には書き易いものであります。但、その文章に生氣がなかつたら、全くつまらぬ文章となります。故に過去の思想感情を再現するに當つて、當時の自分に立ちかへつて、その生氣ある眞感想をうつし出す様につとめさせねばなりません。平素追憶の習慣をつけることは、この種の文章を書く上に於て大切な事であります。こゝでまた日記を誌すことを奨励してほしいと思ひます。日記はその日その日の感想を反省して、之を新にする習慣をつけるのみならず、時々之を讀みかへして、過去の感想を追憶するに便利であります。

次に修辭の方から、歴史現在法の特徴を教へて、此の種の文に生氣を與へるのには、

有力なものであることを知らしめ、その使用に馴らせていたゞきたいと思ひます。

模範文「子供の時」は随分長い文章であります、誰もよくある経験を、別に飾り立てるでもなく、平凡に無造作に書き流して、然もその間につきぬ趣のある邊は、味はしめて下さい。

文例に就いては別に申し上げる程の事ありません。

参考

思ひ出の表現には大體二通りの手法がある。そのうちの一つは、場所なり人なり繪なり器物なりを中心、それに聯關した色々の記憶を纏めて、「こんな事もあつた。あんな事もあつた。」と云ふ風に叙していく手法であつて、他の一つは或る一つの事柄を見つめて、生き／＼とそれを描き出す手法である。

前者に於ては同時に長い時間に互つての色々な場合を見渡していく態度であつて、どつちかと云へば説明に流れ易い手法であるけれども、後者に於ては、一日とか二日とか或る短い時間に起つた連続

した事柄を、ちつと見つめてゐる態度であつて、あくまで描寫しようとする手法である。

随つて前者に於ては、その折々に於ける氣分の移動を明らかにしないと、力強い表現が出来ないばかりか文意を不明瞭にする恐がある。例へば同じ山でも、或る時には霞の衣を着て、眠つた様な穏かな姿であるけれども、或る時には雪の肌を露して、怒りそのもの、様な物凄い感じを與へる。それ故この山によつて受ける私共の氣分は一樣ではない。この折々の氣分の相違を明らかにするだけの用意がないと、力強い表現を得る事はむづかしい。のみならず、知らず／＼のうちに得てゐるこれらの氣分を混同してしまふと、文意は全く通じなくなる。これがこの手法に於て最も注意すべき點である。ところが後者の手法に於ては、大抵纏まつた氣分に涵つて、筆を進めることが出来る。勿論事柄のうつり變つていくにつれて、氣分にも次第に變化を生ずる場合——例へば「物を失つて非常に悲しかつたけれども、後にそれを得て嬉しくなつた。」と云ふ様な場合もあるけれど、それは、その折の氣分に涵つてさへるれば、誰でも自ら辿り得る氣分の推移に過ぎない。

思ひ出の表現には大體この二通りの手法があるけれども、普通にはこの二つを混用する場合が多い。(吉澤義則氏著「現代作文」)

一二年頭雜感

要旨

特種の感想文でありまして、第二章の「新學年に際して」といふのと同種の文章であります。故に別に申し上げる程の事ありませんが、生徒にとりましては、お正月といふ様な事は特別に大きい感情を持たしめるものでありますから、その發表慾は相當に強いことゝ考へます。故にこの機會を捉へて見ようといふのであります。

文例の「昭和の春」は稍不適當かも知れません。削除せられてもよいと存じます。

参考

年の始に當りて

我々日本國民が哀愁に閉ぢこもつた昭和二年も暮れて、目出たい三年の新春を迎へた。初日うららかにさし出で、我等の心は全く爽やかに、大空の如く清らかである。

門には日の丸の旗の下に、青々した松竹、家にしめかざり、何を見ても、「おめでたう〜。」と呼びかけるやうな氣持がする。

昭和三年、昭和三年。誠に希望にみち〜たる年ではないか。龍の天に昇るが如く、理想に向つて勇往邁進すべき年ではなからうか。さうだ。大いに努め勵まうではないか。

今年の干支は戊辰である。明治初年より六十一年目であるのだ。歴史は六十年を週期として繰り返す。明治維新は我が國の一大變革であつた。今試みに見よ。太平洋の彼方では、うはべに平和を叫びつゝ、私に爪牙を磨く國があるではないか。單に彼のみならず、諸外國も亦然り。此の現状を何と見る。此の時に當つて、獨り日本國民のみが、徒に、浮かれ遊んでゐるならば、三千年の光輝ある歴史をもつ我が國の前途の危い事は、火を見るより明らかな事である。

故に此の年は我々にとつては、寸時の油斷も許されない時機であるのだ。國民は浮薄に流れてはならぬ。宜しく心を引き緊めて、此の年を迎へねばならぬ。

さうだ！大いに努めよう。そして此の年を有意義に送らうではないか。(某中學三年生、即題、五十分)

一三 文章の始終 (行文上の注意)

要旨

生徒が文章を書きます時に、先づ腹案を作つて、書くべき要項を書きぬき、順序を考

へて後、筆を採ります様に、習慣づけてゆきたいと思ひます。本章では文の結構の大體を説いて、腹案をも作らないで、むやみに筆を採るべきものでない事を、知らしめたいと思ひます。

文の起首は讀者にあたへる第一印象とも云ふべき大切なものでありますから、昔から多くの人の研究して居るところであります。此の巧拙は直ちに全文に關係して來るものであるから、決して、無造作に筆を下すべきでない事を考へさせたいと思ひます。

次に文の結尾は、全文の結びでありますから、此が力のあるなしによつて、讀者の感銘する所も異なるわけであります。此の結尾によつて文がひきしまり、起首と照應することによつて、一文の統一が出來るといふ、極めて大事なものである事を十分會得させて戴きたいと思ひます。漢文にはこの起首及び結尾が極めて巧みに、出來て居る例が澤山あります。生徒の習つて居る教科書などについて、この邊を指導せられる事を望みます。初心の生徒などは、やたらに文をつゞけたがり、接續詞を用ひたがるものであります。

斷るべき句節を斷らず、無暗に接續詞を用ひると、文が緊張味を缺き、力の弱いものになります。勿論あまりに斷りすぎると、誠に讀みづらい文章となります。併しこの方は生徒にはその弊に陥るものは少いと思ひます。

段落を斷る習慣は、自分の文章の意味を十分明確に讀者に傳へる利益がある外に、文章を書く上によい修練となり、一方、讀書力を高めてゆくものであります。この段落の事も漢文に學ぶべきものが多いと思ひますから、適宜指導せられることを望みます。

参考

「ポット出主義」とは讀んで字の如くぼつと出る主義です。讀者に何等の豫期を與へず、思ひも寄らない邊から、ぼつと書き出す主義なんです。

又

ぼつと出た文章はまたぼつと引込めたいものです。(八波則吉氏)

折角文の書き始めに立派な力のある面白い事が書いてあつても、それがそのまま、立ち消えになるやうでは、その面白さ力強さも殆ど無效果に終つてしまふ。又文の結びに、これまで書いたこと、殆ど何の関係もないやうなことを一寸一二行書いたりする。それがいくら洒落た、氣の利いた文句であつても、結局蛇足であつて、全文の力をそこで抜いて了ふ事にもなる。文章の首と胴と尾とが丁度日が月を照らすやうに、響が聲に應ずるやうに照しあひ、應へあふこと——照應法の効果によつて、文章は始めて引締つた筋道の立つたものになるのである。(金子彦二郎氏)

善用レ兵者。譬如率然。率然常山之蛇也。擊其首則尾至。擊其尾則首至。擊其中則首尾俱至。(孫子)

文章の結構法については古來支那でも西洋でも大分研究された。漢詩を學ぶものは、劈頭第一に起承轉結といふ事を教へられる。これは詩の結構法であるが、文章に於ては、或は起承鋪叙結と五段にも説き、或は起承鋪叙過結と六段に説く。起とは「起り」即ち書き出しである。承とは「うけ」即ち書き出しの趣意を承けて本題に導くのである。鋪とは「はり」で、それを十分敷き廣げて本題に入る事である。叙とは「そへ」で本題の趣意事項を細かに補ひ述べる事である。結とは「むすび」で上各

段を一趣意に結んで止める事である。(芳賀、杉谷兩氏合編、作文講話及文範)

儀式を要する文章には冒頭は一層慎まねばならぬ。その爲に多少分量上の均衡を破ることがあつても仕方は無い。(同書)

冒頭は何でもよい様なものであるが中々むづかしい。韓退之の殷員外回鶻に使用するを送る序「唐受天命爲天子云々」の莊重なる、溫處士を送るの序「伯樂一過冀北之野而馬群遂空」の警拔なるが如きは、冒頭に於て既に他人の及ぶ能はざる所ありと古人も屢々歎賞してゐる。蘇東坡が潮州韓文公の廟碑を作つた時、その冒頭に非常に苦心して數年考へたが遂に「匹夫而爲百世師、一言而爲天下法」の句を得た。それからあとは流るゝが如くに書けたといふ。坪内逍遙氏が「いつも冒頭では苦しむ」といふ苦心談は屢々聞いた。泉鏡花氏の如きも、小説の冒頭が數行意の如くになつて一二回うまく書ければ、後は出てくる人物まかせにどしどしと筆が走るといつてゐる。勿論初心のうちには冒頭からそんなに苦心するよりも何でも構はず盛に書く方がよいのであるが、上達したら冒頭には十分注意すべきものである。(同書)

極短い文章は論外だが、少し長いものになつて、牛の涎のやうにだら／＼と一里も二里も續いて行く

のは妙でない。思想の連続統一は必要であるが、括りくは必ずあつてほしい。思想は大は大きに、小は小なりに、まとまつて始めて読者の腹に入るので、かく折々適當の處で括つて行くことを文章の段落といふ。(中略)

段落を分つ事に意を用ひると自ら文章に段取がついて、どんな長文でも、了解し易くなるのである。西洋の文では段落毎に別の行に書くが、支那の文や日本の古文はどんなに長くつても、行を改めず書き續けるによつて、読み易くするため、段落の處には「」などの符號を讀者が用ひた。「は小段落といつて意味が小さく括られる處」は大段落といつて意味が大きく括られる處に用ひる。日本の近代の文章は洋文に倣つて行を改めて書く様になつたから、段落の符號は不必要であるが、段落の心得だけは始終持つてゐなくてはならぬ。殊に長篇の文章になると數段落のものを合せて節となし、數節を章となし數章を篇とするといふやうに、系統を立て、かゝらねばならぬ。(同書)

一四 冬の日

要旨

冬の日の様々の叙事叙景を書かせようと思ひます。北國は北國の、南國は南國の冬が

あります。今まで活動して來た學生は、多くその活動を阻害せられて、所謂冬籠を強ひられる時季です。勿論、スキーやスケートといふ様な運動も盛に行はれる地方もありませうが、中學生の大部分は、引籠り勝と思ひます。こんな時には、色々の思索に耽けらしめるのもよい事でありませう。旁々此の頃の心の産物を發表せしめようといふのであります。

一五 和歌と俳句

要旨

和歌や俳句といふと、形式が定まる爲か、生徒は文章の時より一層こしらへるといふ弊に陥りやすいものであります。併し、如何にその形式はきまつて居ようと、和歌も俳句も文章と少しもかはる事なく、各自の心的存在を發表するものであることを、十分了解させてから、試作せしめられたいと思ひます。ただ、骨の折れるところは、文章と異

なつて、或る一定の形式によつて、己の思想感情を發表するといふ事です。これは理窟よりも馴れるといふ事が大切であります。故に多讀と多作といふ事は一般の文章以上に有效なものであります。

初心者の和歌や俳句は多く理窟に墮する嫌があります。此は真情の吐露でなくて、ひねくりまはして作り上げた證據であります。斯の如き場合は、嫌惡の生せぬ様適當に指導してやるべきであります。

本章にあげました例は、學年末の頃にふさはしいものではありません。これは、寧ろ都合のよい場合に、適宜繰りかへて教授せられることを望みます。

参考

私共の心を、その溢れるがまゝに、すなほに歌ひ出したものが詩である。あめつちの姿を映しては消す、不思議な心の鏡には喜びも映れば、悲しみも映る。その喜びや悲しみが、さながら吐息のやうに

軽く、泉の様に爽やかな調子をとつて、私共の胸の奥から涌き出たとき、そこに詩が生れるのである。それ故詩は努力して作るものではない。たゞ思ふが儘に歌へばそれでいゝ。自然の美しさに對してあける讚嘆の叫び、人生の悲しみに對して訴へる嘆きの聲、様々な想像に對する憧憬の言葉は、それらが皆詩であり、詩の生れる境地である。(吉澤義則氏著「現代作文」)

嘗て詩人生田春月氏は、詩の表現を琴や笛の鳴るのに譬へられた事がある。詩人はちやうど小鳥など、同じやうに、ある大自然の神にあやつられて歌ふのである。そのものによつて奏でられる琴、そのものによつて吹かれる笛に過ぎない。琴や笛がその奏でられるがまゝに、その吹かれるがまゝにすなほに鳴るやうに、詩人も大自然の奏づるがまゝに歌はねばならぬ。そこにはじめて本心の聲が出て眞實の詩が生れるのであると説かれてゐる。詩を作るには先づ何よりもこの態度が必要である。徒に内容を飾つたり、技巧の末にとらはれたりして、本心の聲を閉却するに至つては、決して純眞な詩の生れるものではない。(同書)

附 録

作文新編備考

参 考 文 題

四月

二年生になつて

本學年こそは

新入生を迎へて

櫻

我が好む花

春の野

潮干狩

天長節

遠足に友を誘ふ

五月

落花

新緑

修學旅行記

端午の節句

海軍記念日

六月

茶摘み

首夏

梅雨

鮎漁

田植ゑ

螢狩

七月

川遊び

海水浴

夏休には

七夕

蚊帳

蠅退治

八月

暑中見舞の文

旅行先より友に送る手紙

登山の記

土用干

真夏の樂み

歸省

銷夏日記

九月

夏休を顧みて

附 録

残暑見舞の文

暴風雨見舞の文

秋風吹く

二百十日

第二學期を迎ふ

重陽

十月 運動會

學生と運動

燈下親しむべき候

讀書

秋

菊

收穫

茸狩

栗拾ひ

月

紅葉

十一月 明治節を祝ふ

神宮競技を見て

體育デー

御即位の大典を壽ぐ

十二月 師走

霜

落葉

歳暮所感

本年を顧みる

冬

初雪

一月 新年を迎へて

年賀の手紙

寒稽古

スキ一の樂み

雪中の松柏

二月 追儺

立春

梅花

紀元節

本校に入學を勧める手紙

三月 卒業生を送る

陸軍記念日

附 録

本學年の回顧

進級を恩師に報ずる手紙

彼岸

春が来た

〔雜〕友

我が家

我が希望

小學校時代の思出

わが母校

わが机

犬

我が崇拜する人物

僕等の先生

僕は鉛筆である

英語の時間

同窓會

級會の記

草履

武道

力

海と山

春と秋

——を讀みて

——傳

以上

作文新編備考ノ二

昭和三年十二月十五日印刷
昭和三年十二月十八日發行

非賣品



編者 東京市神田區通神保町六番地 光風館編輯所
發行者兼印刷者 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎
發行所 東京市神田區通神保町六番地 光風館書店
(電話 神田三〇八七番 接替口座東京三二七番)

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

大正十五年二月十日 文部省檢定濟
昭和三年九月二十八日 文部省檢定出願
大正十五年五月二十五日 文部省檢定濟

中國教科書

國文讀本

現代文新鈔

洋裝全十冊

洋裝全十冊

洋裝全五冊

(日清印刷株式會社印刷)

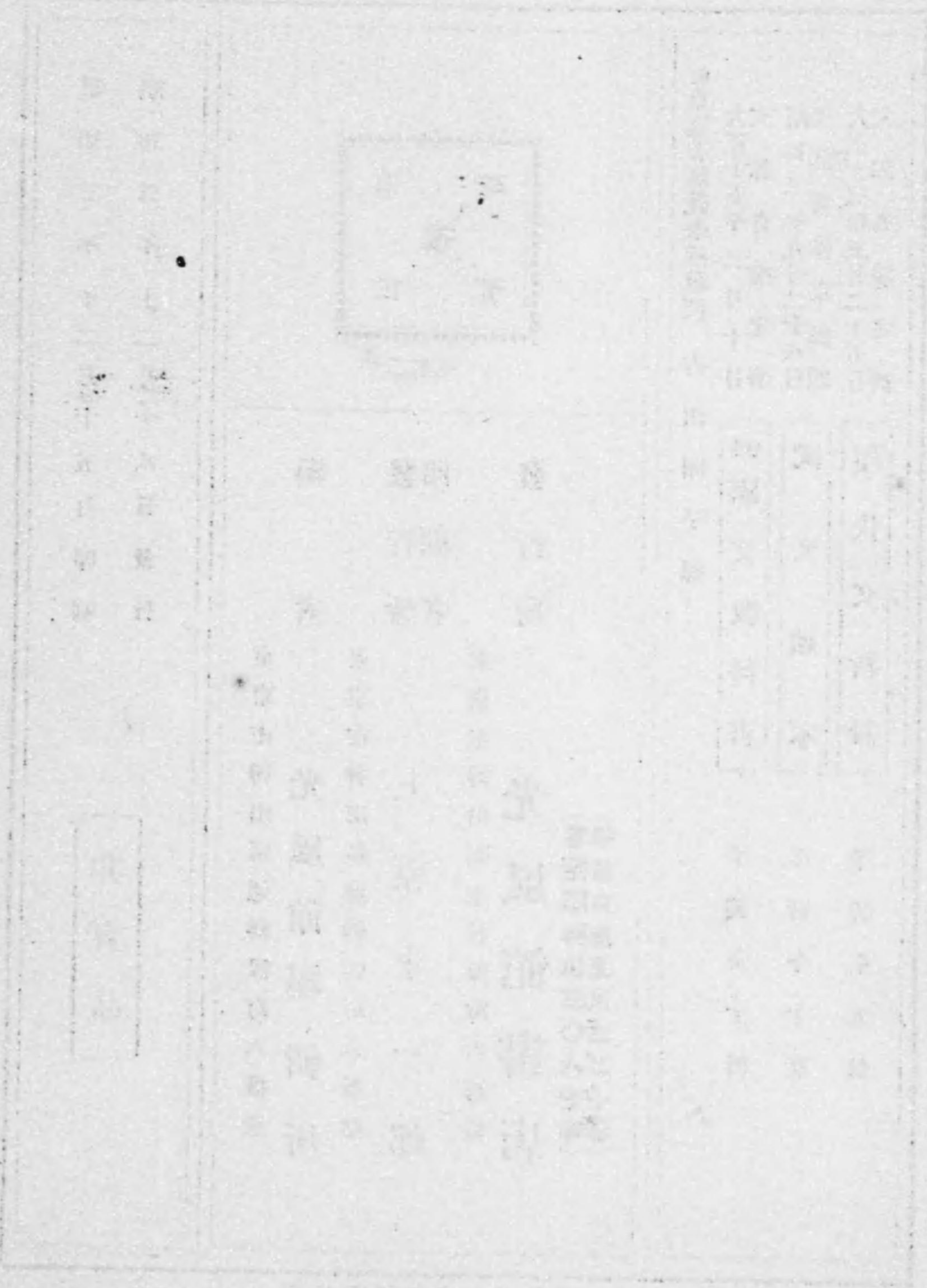


Figure 1

Figure 2

Figure 3

Figure 4

Figure 1

